

国際伝統医療学会参加記

中 澤 正 孝 久 米 信 好

I. プロローグ

著者らは平成23年9月15、16日の日程でモンゴル国の首都ウランバートルで開催された「第5回国際伝統医療学会」に参加した。東京有明医療大学からの参加者内訳は、花田学園の櫻井康司理事長、柚木脩柔道整復学科長、ほか同学科教員5名(著者ら2名含む)、同学科学生3年生6名、2年生2名、1年生3名の合計18名であった。本学会への参加には、国立モンゴル健康科学大学と東京有明医療大学柔道整復学科の学生間交流を図る目的も含まれており、今回学生及び教員同士の交流が、著者の一人である久米の立案によって実現した。

日本の柔道整復師とモンゴル国との関わりは、モンゴル出身の元横綱朝青龍関が治療のため東京都内の接骨院に通院していたことに端を発する。これがきっかけとなり、平成17年3月に、モンゴルの体育協会、オリンピック協会及び朝青龍財団からの正式な招聘を受けて、久米を含めた柔道整復師がモンゴル国を訪問することに繋がっていったのである。

モンゴル国内の医療事情から見ても、柔道整復術が注目されつつある理由が窺える。首都ウランバートル以外の地方では、放牧を中心とした経済活動が現在でもなされ、落馬や転落による怪我が多発するにもかかわらず、医療機関に搬送され治療を受けるまでに数日ほど費やされる場合がある。また一部の地方診療所では、常備されている検査器具が血圧計だけという厳しい医療体制が存在する。このような現状であっても、柔道整復術は、手術を必要としない怪我の初期治療に対して、入手容易な材料を使用して治療が可能である。まさしくモンゴルにとって受け入れやすかった医療の一つが、日本の柔道整復術であったと理解できよう。

今回の訪問は、久米らが初めて正式訪問した3月ほどの寒さではなかったが、チンギスハーン国際空港に降り立った我々はスーツケースからダウンジャケットを取り出さずにはいられない程の寒さであった。日本ではまだ残暑が続きネクタイを締めるのも億劫である程だったが、機内アナウンスで到着地の気温は、確か5℃と言っていたことを思い出す。モンゴルでは暖房器具を使用できるのが10月からと法律で決まっている。当夜、ホテルには薄い毛布しか用意されていなかったため、急激な温度変化についていけず我々多くの参加者が寒さに眠れず往路の疲れを癒すことができなかった。

II. チンギスハーンホテルにて

二日目は学会参加のためチンギスハーンホテルに向かった。マイクロバスで向かう際にもあちこちで目に付くのがチンギスハーン像(写真1)である。話によれば「チンギスハーンはモンゴル帝国の初代皇帝として1206~1227年に在位し、遊牧民諸部族を一代で統一するだけでなく中国北部、中央アジアおよび東アジア等を征服して、当時の世界人口の半数以上を支配するに至る人類史上最大規模の帝国を築き上げた人物」であり、現在でも国家創建の英雄として称えられているのが納得できる。その進軍経路をたどてみると、騎馬隊ゆえ平地を突き進んでいたことがわかる。チベット高原やパミール高原を避けて西進し、カスピ海を抜けて北上していく中で、他国の軍隊が鍛え抜かれた馬に乗った勇敢な戦士に平地で蹴散らされたらお手上げになるのも想像に難くない。ホテルの正面玄関に飾られた英雄・チンギスハーンの大きな肖像画を横目で見つつ学会場へと進んだ。本学会にはモンゴル、ロシア、日本、中国、ギリシャなど11カ国からの参加者があり併せて120演題程が登録されていた(写真2)。モンゴルにおける伝統医療は古代イン



写真1 宿泊ホテル敷地内にあるチンギスハーン像



写真2 学会風景

した股関節内転筋群強化の効果」について、そして筆者の一人である中澤は「柔道整復師が行う鎖骨骨折の保存療法」について、それぞれポスター発表を行った。これらの発表は参加者の興味を引き付け、有意義な質疑応答がなされた。モンゴルの研究者の発表はherbal medicineに関するものが多く、薬草の効用や処方などの発表にも多くの注目が集まっていた。

Ⅲ. 突然のサプライズ

学会参加後、教員と発表予定の学生は、ホテルへ戻って夕食をとってから、翌日開かれる国立モンゴル健康科学大学との学生交流の準備に取り掛かった。本学の3年生6名が「腰椎分離症」についてモンゴルの健康技術学部の学生の前で発表することになっていた。モンゴルでは医師不足という国情もあって、准医師という資格者が地方医療を中心的に担う役割になっていると聞く。その学生たちにプレゼンするということで彼らも緊張していた。日本では、夏休みに集まって資料を作成し、予演会をして準備してきた。ホテルでスライド順序の変更、発表段取りやオープニングの挨拶など最終チェックに励んでいたが、緊張のためかすでに若干ぎこちない者もいた。そんな最中、外で大きな爆発音がしたのでホテルの外を覗いてみると打上げ花火が上がっていた。日本で行われるものほど大きくはないが、道路一本隔てた向こう側の空き地で上がっているのが胸を突き刺すような轟音が響く。色とりどりの火花がすぐ近くまで飛んできて、いつも遠くから眺める二次元の花火と違って立体感がはっきり感じてとれるものであった。この思いがけないサプライズのおかげで彼ら全員がリラックスして取り組めるようになり、その後の準備もはかどったようである(写真3)。



写真3 発表前夜の打ち合わせ

Ⅳ. 日本人女性が教えてくれたこと

3日目は、参加者全員で国立外傷病院の見学を行った。ここは外傷患者だけを治療の対象とするベッド450床を有する病院である。その中は衛生的とはいえず、外来患者はほとんどが立って順番を待っている。案内されて、発達性股関節脱臼の小さな子や骨折後で鋼線牽引している若い男性など、入院患者の状態を見てまわるが、その多くの人たちから早く治して復帰しようという雰囲気を感じ取ることができなかったのは筆者だけだろうか。総じて、病院は「陽」の雰囲気を持つ性格ではないにしろ、患者とその介護者の表情からは日本で感じ取ることのできる「前向きさ」が見てとれないことに筆者は一抹の寂しさを感じた。そんな中、ひとりの日本人理学療法士に出会った。まだ30代と思われるその女性はJICA(国際協力機構)の派遣でリハビリを担当し、自分が持つ技術を少しでも役に立たせたいという思いでこ

ここに来ているという。モンゴル語を話せるようで現地の患者に何かを言っている。リハビリに励んでいる彼らの顔も先生の声に呼応して元気そうに見えた。彼女の奮闘ぶりを見て、「勇気をもたらした」「感動した」「日本だけの仕事を選択肢ではない」と感想文に綴ってくれた学生もいた。ようやく見えた「陽」の場面。ひょっとしたら、柔道整復師に求められていることはその技術だけではなく、この病院内に蔓延している、言ってみれば閉塞感を解き放つようなことなのかもしれない。外傷の保存的治療に対する知的、技術的提供から始まった柔道整復師の役割はそれだけに留まることなく今後ますます発展することが望まれる。

V. 学生発表

さて、学生にとっては初めての発表。しかもその場は海外であり、一大イベントであった。外傷病院を後にした我々は現地学生やその教員が待つ国立モンゴル健康科学大学附属健康技術学部に向かった。到着して多くの学生がいる校内に入って、教育用模型などを見学した後、発表会場に入った。昨晚あれだけ準備したのだから心配ないなどといっても気休めにならないほど学生たちは極度に緊張していた。緊張のためか体調を崩して発表できなくなってしまった者もあり、彼らは混乱していた。モンゴルの学生にとって腰椎分離症の概念はあまり普及していないようで、どんな話をするのか彼らは興味津々であった。その耳目を集める中、プレゼンが始まった(写真4)。しかし、気の効いた女子学生が一言モンゴル語で挨拶して笑いが漏れると、もうやるしかないと覚悟を決めたのであろうか、発表者の雰囲気少し変わった。通訳が入ってかなり多くの時間が取られてしまったが、腰椎分離症の運動療法を二人の学生が実演してモンゴル学生の笑いをとりつつも、無事彼らはやり遂げた(写真5,6)。後日提出された感想文の中では「語学の壁」「発表方法の難しさ」「真剣に聞いてくれることの嬉しさ」が感じられたと書いている。だが、学生たちが今回の発表で特に学んだことは互いに支え合って一つのことを成し遂げるということではないだろうか。これは医療を実践する上で不可欠の精神であり、今彼らがそのことを認識していなかったとしても、今後各々が独り立ちした際に大きな財産になると確信している。



写真4 発表のはじまり



写真5 運動療法の実演



写真6 真剣な眼差しのモンゴル学生

VI. 今後の展望

すでに、モンゴルにおける柔道整復術の普及事業はNGO（非政府組織）やJICAなどの支援を受け、約8年間にわたり継続されている。平成24年10月3日から6日にかけて、国立モンゴル健康科学大学の70周年記念式典に学術交流の国際協定を結ぶ18カ国からの招待者が訪れた。日本からは7大学と公益社団法人日本柔道整復師会の代表者が集まり、本

学からは櫻井理事長と久米が参加した（写真7）。現在、国立モンゴル健康科学大学附属健康技術学部内に伝統治療学専攻を作るための準備が進んでいる。リハビリテーション専攻の成功例をもとにして、本学柔道整復学科のカリキュラムの使用をモンゴルの文部省に申請して国立モンゴル健康科学大学に柔道整復学専攻を立ち上げたいとの意向を本学は受けている。近く、国立モンゴル健康科学大学の学長ならびに副学長が来日して具体的な話をしたいとの要望も受けている。今後、本学と国立モンゴル健康科学大学との間にさらなる国際協定が締結され、大学間で教員ならびに学生の交流が深まり、単位互換や留学制度の確立にまで両国の親交が発展することを切に望む。



写真7 70周年記念式典で挨拶する櫻井康司理事長

Ⅶ. エピローグ

日本固有の伝統医療として発展してきた柔道整復術がその活躍の場を海外に広げる契機となったのは、2002年、WHO本部（スイス・ジュネーヴ）を本学の橋本教授らが訪問して柔道整復術がJudothrapyとして正式に認知されたことにある。以降、国際協力関係にある国は韓国、ポルトガル、ミクロネシアおよびカンボジア等へと拡大している。本学は、国外へJudothrapyを発信すべき中心的役割を担う教育・研究・臨床機関として、ますます発展することが期待される。

参考文献

- Judothrapy世界への飛躍Ⅰ．社団法人日本柔道整復師会発行．2003
- Judothrapy世界への飛躍Ⅱ．社団法人日本柔道整復師会発行．2009